

『日本文学 風土と構成』

—久松潜一先生へ—

久松先生。先生の御近著『日本文学 風土と構成』を、斎藤先生からお借りして拝見しました。たいへん懐しく存じ、書評などというのではなく、何か先生にお話し申したい衝動にかられて、筆をとったところでございます。

昨年五月こちらに帰ることにきめ、せっかく御縁があつて同じ職員室で過ごす身となった幸せを放棄して、ただひたむきに故郷さして帰ってきたのでした。それでも一年余りの間、毎週二度ずつお目にかかることができて、終戦後の学徒の苦悶についても两三度御話し申しあげ、先生からも有り難いお言葉をいただいたことは、今もはっきりおぼえております。あのころの狂気に近いまでの魂の動揺も、先生の咫尺に身をおき、博く温い御風格に親しく接していると、おのずから鎮まりゆくのを感じたのでした。

今から十年前の夏、紀州高野山で開かれた日本文学講筈が、私どものその後の共同事業の大事

な基点となったことは疑う余地がありません。垣内先生と、その教えをうけられた岡崎・斎藤・久松三先生、私どもの日ごろもつとも敬慕しまいらせているこの四先生を招じて、日本文学の講筈をもつことは、私ども後進にとって、国文学の血統を自身の内に明確に意識することでありました。岡崎先生は御病身のため遠隔の地にお出でくださることがどうしてもできなかったことは残念でありましたが、岡崎・斎藤・久松三先生から垣内先生へ、そして芳賀先生へ、さらに本居宣長へと溯る血統の意識が、私どものその後の歩みを規定したといつてよろしかろうと存じます。霊地の杉の古木の間を会場に通ずる道を歩みながら、私どもはただ言いしれぬ感動に胸をどろかせたのでした。このたび御高著を拝見しながら、はからずもあの時のことを想い起こしました。その後先生にお目にかかるたびに、いつも「あああの時はよかったですね」というお言葉を承り、そしてただそれだけで無性にうれしかったものでした。

頃日、芳賀先生の『国民性十論』を繙きつつ、恐らく今日の新しい国文学者からはあまり顧慮を払われていないと思われるこの書が、いわばその後の国文学の生長のために、肥沃広大な土壌を与えたことは確かであろうと思ったことでした。たとい、その中に述べられてあることで長所とされたものが、今日悲しい短所として反省されねばならぬことがあるとしても、学問の根底に培ったものとしての功績は没し去ることができません。そして垣内先生やその教えをうけられた三先生にも、たえず学問の大本を踏まえた高邁な風格を、共通に何うのであります。末節にわた

ってはどうかであろうと、私も後進がとまかく斯道に心をつなぎえているのは、先生方の御学問がおのずからに指針するところに負う所が大きいのであります。このころ思うところを、私はこのように率直に申しあげることができません。このたびの御高著も、むろん細部の一々の御説に教えられるところが多いのでありますが、あるべき国文学の性格の大きな輪廓を示していただく点に、より以上心ひかれたのでした。殊に国文学の風土的地盤の特性についての御考察は、示唆するところ大でありました。

この文章をここまで書いてきたところへ、朝日新聞の十二月十四日の「天声人語」は、このようになことを知らせてくれました。

「去年の冬は渡り鳥の飛来が多かった。ガンやカモも多かったし、業平の歌で知られたミヤコドリもしぎりに隅田川の水面を飛び交い、ときに銀座にまで姿を見せることさえあった。シベリアの野に故国恋う人たちが『わが思ふ人のありやなしやをこと問ふ』かりの姿だと涙ぐむ人も多かったのである。ソ連からの引揚げはまた明春まで中止となった。この冬もまた渡り鳥が多からう。」

この文章をよんで、あ、こんなところに文学が生きていたのかと驚き、さらに渡り鳥と日本の風土ということについて考えたのであります。秋風とともに寒い北国からはるばるこの国に訪れた鳥が春帰りに、入れ替りにこんどは熱い南の国から別の渡り鳥がくる日本の風土の特性を思い、

こういう風土を地盤として生産される文学のことを思ったのであります。「雁の使」などという言葉も、新しく意識にのぼって来たりします。はるばる北から南から日本の美しい風土めがけて渡来する小さい季節の使者たちに託して、私は日本文学の世界性ということも考えてみたくなります。そしてさらに、日本の美しい風土と、それにもまさる美しい風俗にあこがれて、世界の国々の人々がこの島に訪れる日を、夢想してみたくもなるのであります。そのためにも、数々の美しい心の花を咲かせた、この国の風土の特性を、おたがい同胞の間に明確にするとともに、世界の国々に宣明することが、緊要であろうかと思えます。

先生の御高著を拝見して、はからずも右のようなりとめもないことを考えたのであります。が、御無音を謝する書信にかえて、この駄文を載せてもらうことにしました。

今年もあとのこり少なくなりました。来るべき年が、この国にとっても、そして先生にとって、より光ある年たらんことを祈りつつ、筆を擱きます。

(昭和二十三年十二月)